

## 人を生かす神のことば (同性愛は罪?)

昨今、様々な媒体を通じて「LGBTQ」という言葉を見聞きするようになりました。Lは、レズビアン（女性の同性愛者）。Gは、ゲイ（男性の同性愛者）。Bは、バイセクシャル（両性愛者）。Tは、トランスジェンダー（生まれた時の性別と自認する性別が一致しない人）。Qは、クエスチョニング（自分自身のセクシュアリティを決められない、分からない、または決めない人）のことで、日本人口における性的マイノリティの割合は10人に1人であるなど、諸説ありますが、恐らくある程度の人数の教会であれば、その中に同性愛者がいると推測できます。推測の域を出ないのは、キリスト者でありながら同性愛者であることを告白する人は少ないからです。なぜなら、多くの教会（特に福音派）において“同性愛は罪”という考えが常識となっているからです。従って、一般的にもキリスト教は同性愛に非寛容というイメージが浸透しているのでしょう。

この同性愛は非常に古い歴史を持っていて、紀元前380年頃（推定）に書かれた哲学者プラトンの「饗宴」には、当時一般に広く認められていた「少年愛」と呼ばれる同性間の恋愛が描かれています。また、日本においても神話時代にまでさかのぼることができる説もあり、男色を好んでいた戦国武将が多くいたことは、よく知られています。興味深いことに、日本において同性愛がタブー視されるようになったのは明治期以降で、それ以前は同性愛に寛容な民族であったということです。非寛容になったのは、開国と同時にキリスト教が入ってきた影響と考える人もいますが、明治時代の「富国強兵」政策の中で、天皇を頂点とした家制度にそぐわない存在（同性愛者）が排除されていった、というのが実情のようです。確かに、キリスト教そのものが日本を同性愛者に非寛容な国にしたわけではありませんが、多くのキリスト者が「同性愛は罪」と考えていることは事実です。

ただ、日本でも性的マイノリティのカップルを夫婦と同じようにみなすための「同性パートナーシップ制度」が広がりつつあることから分かるように、現代社会では人権問題でもあるので、多くの教会組織や聖職者が表立って反対を表明することは避けているのが実情です。そのような社会情勢の影響もあるのか、最近では同性愛者であることを公言する聖職者も増えていて、その立場からの聖書解釈を知る機会も増えてつあります。つまり、キリスト教界には同性愛について賛否両論があるわけです。私がこの問題に取り組もうと思った動機は、ある事実を知ったことでした。それは**多くの同性愛者が幼少時から人と違うことに悩み、一度は命を絶つことを考えたという現実**です。私は自問しました。「もし、自分が同性愛者としてこの世に生を受けていたら、キリスト者としてどう歩めばよいのだろう…」と。私は、同性愛を罪とする福音派（ペンテコステ系）に属する教会で信仰の歩みをスタートさせましたので、自分の心に問い掛けずにはられませんでした。

## 短編説教 3

実は、今回のメッセージ作成のため出版社を経営する友人に、キリスト教の立場から同性愛について書かれている本がないか尋ねたところ「この問題について、自分の考えを明らかにすると、左右どちらかからの集中的な批判に見舞われます」という、キリスト教界において、同性愛の取り扱いがいかにかデリケートな問題であるかのかがよく分かる助言を頂きました。確かに、教団などの組織に属している教会の牧師であれば、たとえ組織の常識（教え）に疑問を感じることもあっても、その常識から外れたことを語ることは簡単には出来ることではありません。ただ私の場合は、キリスト教という宗教界の常識に束縛されない立場（自由人）ですから、この問題について私なりの答えを出してみたいと思います。

そもそも聖書には「同性愛」という言葉そのものは出て来ませんが「ここは同性愛を意味している」と読み取れる代表的な箇所があります。旧約聖書ではレビ記18章22節と20章13節です。

**レビ記18章22節と20章13節（新共同訳聖書）**

18:22 女と寝るように男と寝てはならない。それはいとうべきことである。

20:13 女と寝るように男と寝る者は、両者共にいとうべきことをしたのであり、必ず死刑に処せられる。彼らの行為は死罪に当たる。

この22節について、ペンテコステ信仰を強調する注解付の聖書「フルライフ・スタディ・バイブル」（ファイヤーバイブル）は、次のように解説しています。

同性間での性的行動（→創19:5注）は神に対して恥ずべき罪である（→ロマ1:27注）。ある人はこれを旧約聖書の律法の一部であるからもはや適用されないと言う。そしてこれを13～15章の今日適用されない沐浴や清潔などの規則と同じだとする。けれども同性愛についての禁止令はそのような律法と一緒ににはできない。これは姦淫、近親相姦、獣姦（動物との性的行動）など、ほかの非合法的な性的慣習の中で扱われている（18:6, 23）。今日、この邪悪な行動を正当化しようとしている人が少なくない。

22節と23節の「いとうべき」とは、嫌って避けるべきということで、口語訳は「憎むべき」、新改訳は「忌みきらうべき」と訳しています。確かにここを一読する限り、同性愛は否定されているように思えます。ただ、これについては次のように考えるキリスト者もいます。

レビ記は、当時のイスラエル民族に対して「特別に神に選ばれている」ことを意識させるために様々な規定を記した書物であるが、ここを理解するためには、レビ記が書かれた

当時の時代背景を理解した上で読まなければならない。それは、常に民族存亡の危機に見舞われてきた彼らが民族の純潔を守りつつ、人口の維持も図らなければならないため、他民族との緊張の中で男性中心的なリーダーシップを重視したことであるが、具体的には、女性は男性の私有財産で、また女性は汚れているという、現代では到底受け入れられない男性支配のもと、特に異邦人との交流や異邦人の風習と思われるものをできるかぎり排除するという固有の社会構造である。従って、固有の文脈の中で出来てきた規定を現代の私たちがまったく異なる文脈の中に生きていながら、そのまま自分たちの生活の秩序として生かすことは、ナンセンスである。

ただ、同性愛を“罪”と断じるキリスト者は、その根拠を旧約聖書だけでなく、新約聖書の中にも見出しています。例えば、使徒パウロが残した文書です。

#### ローマの信徒への手紙1章24-27節（新共同訳聖書）

1:24 そこで神は、彼らが心の欲望によって不潔なことをするにまかせられ、そのため、彼らは互いにその体を辱めました。25 神の真理を偽りに替え、造り主の代わりに造られた物を拝んでこれに仕えたのです。造り主こそ、永遠にほめたたえられるべき方です、アーメン。26 それで、神は彼らを恥ずべき情欲にまかせられました。女は自然の関係を自然にもとるものに変え、27 同じく男も、女との自然の関係を捨てて、互いに情欲を燃やし、男どうして恥ずべきことを行い、その迷った行いの当然の報いを身に受けています。

この箇所について、福音派の代表的な注解書（新聖書注解／いのちのことば社）は、次のように解説しています。

26 創造者に対する転倒した関係は、人間の倫理の基本の一つである男女の性的関係の倒錯となってあらわれてくる。そこにも、神のさばきの現実がある。「自然の用を不自然なものに代え」とは、自然に従った性のあり方と機能を自然に反するあり方と機能にすりかえてしまうことである。性そのものが悪なのではなく、性の誤った用法が問題である。パウロが特に指摘しているのは、同性愛の罪である。27 男性においても同様である。「男が男と恥ずべきことを行う」とは、当時のローマの退廃的な文化の中で広く行われていた男色のことである。今日の世界においても、倒錯した性関係が再び一般化しつつあり、われわれはそれらの中に神に背を向けている現代人に対する神のさばきを見るのである。その結果は、人間性そのものの破壊である。

ここでは、使徒パウロが同性愛を否定しているように思えますが、これについても次のように考えるキリスト者がいます。

## 短編説教 3

ここでパウロは「造り主の代わりに造られた物を拝んでこれに仕えた」(25)人たちの罪を指摘するが、なぜ偶像礼拝と「不潔なこと」「体を辱めること」が関係するのか？それは、当時のローマ神殿では神殿娼婦・神殿男娼と呼ばれる人たちがいて、これらの人々と性交すると神々と交わることになる。あるいは、神々の前で性交することで神々を喜ばせたり、刺激したりして、その神々にも多産や豊作の恵みのご利益を発揮して頂く、というような意味付けで“性の儀式”が行われていたからである。これは、ローマの神殿だけではなく古代の宗教にはよく見られる現象でもあった。つまり、ここでパウロが問題にしているのは、神殿で行われる神殿娼婦・神殿男娼との性の儀式を含む、ローマの神々を祭る神殿での祭儀、及びそこに詣でる人々のことを指していると考えることができる。従って、そうであれば、現代の私たちが念頭に置いている同性愛とは異なるものであるから、単純にこの箇所を現代の同性愛に対する非難の根拠として引用するのは、聖書の正しい使い方ではない。

ただ、これに関しては「そうであるならば、パウロは神殿で行われる祭儀以外の男同士の性愛を認めていたのか？」という詰問と共に、「男色をする者は、神の国を相続することができない」(1コリ6:9-10)というパウロの言葉から反論がなされます。これに対しては「ここで言われている男色とは、強制的に誘拐されてきた少年を売り物にした売買春のこと。つまりコリント書で非難の対象とされている男色とは、児童虐待及び性犯罪のことであり、現代のキリスト教界において問題にされている同性愛とは無関係である」という再反論がなされます。結局、同性愛を非難する人たちと、擁護する人たち、共にキリスト者でありながら、あくまでも平行線に終わるわけです。

ですから、この問題(同性愛)を教会単位で扱う場合、最終的には教会で同性愛者同士の結婚式をするのかしないのか、ということが大きな議論になるようで、実際ある教団ではその議題は何度も総会などで取り上げられたのですが、多数決などで結婚式を行なうことになった場合、教会が分裂してしまうことになりかねないので、決をとらずに審議未了にしたとのことです。つまり、この問題は“教会を建てもし、倒しもする”ような厄介な問題であることが分かります。

それを裏付けるかのように、この問題についての理解の仕方は各教会によって異なります。例えば、カトリック教会では「同性愛自体は罪ではないが肉体的に行えば罪になる」という理解のようですし、最近ではプロテスタント教会においても同性愛者であることを告白する牧師もいて、同性愛に対する理解度にはかなりの温度差があります。肯定派が増えつつある理由としては、使徒パウロが生きていた時代には想像もできないほど“性”の多様性についての知識、つまりLGBTQなど、いわゆる性的マイノリティに関する知識が深まったことが考えられます。

## 短編説教 3

私たちが日常生活で使っている性別というものは、多くの場合「生物学的な性」のことで、これは基本的に男性と女性の二つに分かれています。また生物学的な性とは別に「性自認」というものがあり、これは「自分の性をどのように認識しているか」を示します。例えば、男性として生まれてきたけど自分の内面は女性だと認識している人たちは、生物学的な性は男性で性自認は女性、ということになります。

更に、異性愛・同性愛・両性愛などの「性的指向」もあります。これは「性的意識がどの方向を向いているか」を示すもので、異性に向いていれば異性愛、同性に向いていれば同性愛、両性に向いていれば両性愛です。では「生物学的な性は男性で、性自認は女性」という人で、性的指向が男性に向いている人は「同性愛」でしょうか？それとも、性自認を基準にして異性愛になるのでしょうか？単純に生物学的性を基準に考えれば「同性愛」ということになりますが、当事者たちは「女性である自分が男性を愛している」のだから、「異性愛」と考えます。

こういった知識が蓄積されると、固定観念を一旦横に置いて「同性愛」という問題と真剣に向き合わざる負えなくなります。果たして私たちキリスト者は、この厄介な問題から何を学ぶべきなのでしょう？私は、同性愛を非難する人たちと、擁護する人たち、双方の主張を見聞きしながら、この問題を考える中で、一人の人物を思い浮かべました。それは主イエスの弟子であり、異邦人（自分と異なる人種）に対する誤った考え方や偏見が根強く植え付けられていた、シモン・ペテロです。使徒言行録10章9～33節を読みます。

**使徒言行録10章9-33節（新共同訳聖書）**

10:9 翌日、この三人が旅をしてヤッファの町に近づいたころ、ペトロは祈るため屋上に上がった。屋の十二時ごろである。10 彼は空腹を覚え、何か食べたいと思った。人々が食事の準備をしているうちに、ペトロは我を忘れたようになり、11 天が開き、大きな布のような入れ物が、四隅でつるされて、地上に下りて来るのを見た。12 その中には、あらゆる獣、地を這うもの、空の鳥が入っていた。13 そして、「ペトロよ、身を起こし、屠って食べなさい」と言う声がした。14 しかし、ペトロは言った。「主よ、とんでもないことです。清くない物、汚れた物は何一つ食べたことはありません。」15 すると、また声が聞こえてきた。「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない。」16 こういうことが三度あり、その入れ物は急に天に引き上げられた。17 ペトロが、今見た幻はいったい何だろうかと、ひとりで思案に暮れていると、コルネリウスから差し向けられた人々が、シモンの家を探し当てて門口に立ち、18 声をかけて、「ペトロと呼ばれるシモンという方が、ここに泊まっておられますか」と尋ねた。19 ペトロがなおも幻について考え込んでいると、“霊”がこう言った。「三人の者があなたを探しに来ている。20 立って下に行き、ためらわないで一緒に出発しなさい。わたしがあの者たちをよこしたのだ。」21 ペトロは、その人々のところへ降りて行って、「あなたがたが探しているのは、このわたしです。どうして、ここへ来られたのですか」と言った。22



すると、彼らは言った。「百人隊長のコルネリウスは、正しい人で神を畏れ、すべてのユダヤ人に評判の良い人ですが、あなたを家に招いて話を聞くようにと、聖なる天使からお告げを受けたのです。」<sup>23</sup> それで、ペテロはその人たちを迎え入れ、泊ませた。翌日、ペテロはそこをたち、彼らと出かけた。ヤッファの兄弟も何人か一緒に行った。<sup>24</sup> 次の日、一行はカイサリアに到着した。コルネリウスは親類や親しい友人を呼び集めて待っていた。<sup>25</sup> ペテロが来ると、コルネリウスは迎えに出て、足もとにひれ伏して拝んだ。<sup>26</sup> ペテロは彼を起こして言った。「お立ちください。わたしもただの人間です。」<sup>27</sup> そして、話しながら家に入ってみると、大勢の人が集まっていたので、<sup>28</sup> 彼らに言った。「あなたがたもご存じのとおり、ユダヤ人が外国人と交際したり、外国人を訪問したりすることは、律法で禁じられています。けれども、神はわたしに、どんな人をも清くない者とか、汚れている者とか言ってはならないと、お示しになりました。<sup>29</sup> それで、お招きを受けたとき、すぐ来たのです。お尋ねしますが、なぜ招いてくださったのですか。」<sup>30</sup> すると、コルネリウスが言った。「四日前の今ごろのことです。わたしが家で午後三時の祈りをしていると、輝く服を着た人がわたしの前に立って、<sup>31</sup> 言うのです。『コルネリウス、あなたの祈りは聞き入れられ、あなたの施しは神の前で覚えられた。<sup>32</sup> ヤッファに人を送って、ペテロと呼ばれるシモンを招きなさい。その人は、海岸にある革なめし職人シモンの家に泊まっている。』<sup>33</sup> それで、早速あなたのところに人を送ったのです。よくおいでくださいました。今わたしたちは皆、主があなたにお命じになったことを残らず聞こうとして、神の前にいるのです。」

この箇所は、ペテロが海辺の革なめし職人シモンの家の屋上で、聖霊の示しによって、ある決定的な事柄に気がつく、というより気がつき始めるところです。昼の十二時頃は、敬虔なユダヤ教徒の祈りの時です。シモン・ペテロはイエスの弟子になった後も、この習慣を捨てていませんでした(9節)。まずペテロが屋上で、エクスタシーの状態で見た幻があります。清い食用肉と忌むべき肉です。幻の中のペテロは、レビ記が食用にするのを禁じているような動物まで含んだ大きな入れ物を前にして、頑として拒否したのです。「主よ、それはできません！それをすれば、聖書の掟が無意味になります」と。なぜなら、聖いものと汚れたものを厳格に区別し、汚れたものから離れることこそ神の意志にかなう、と教え込まれていたからです。

次に、ペテロが幻から醒めるのと同時にカイザリヤからの使者が到着します。ユダヤ教徒ではないローマ人の将校からの使者です。「神を敬う人」ですが異邦人であることには変わりありません。羊の肉と豚の肉とくらいハッキリ区別しなければならない。ウナギがスズメダイと一緒にされてはならないくらい、峻別されるべき異邦人です。少なくとも同じ屋根の下に寝起きしたり、同じ食卓についたり、ユダヤ人として考えるだけでも恐ろしいはずの汚れた人間、神聖さ清さからほど遠い、別世界の人間です。その瞬間に御霊がペテロの心に語りかけます。「ためらわずに一緒に行け。この人たちをよこしたのは私だ」(20節)。その時初めて、幻の中で聞こえたあの声がペテロにとって意味を持ち始めます。

「神がすでに清めた。それをお前が清くないと言い張るのか！」(15節)。

### 《 結び 》

この話は表面だけ見れば、ペテロの心にあったユダヤ人特有の偏見の打破ということになります。人間はすべて、ユダヤ人であってもローマ人であっても同等の価値を持つ。故なき差別に捕らわれてはならない。しかし、この話は本当はそんな偏見や民族的差別を捨てて「人類すべて一つ」という博愛主義を教えるところにはありません。

これは五旬節以来、キリストを信じて新しく生まれ変わったはずでいて、本当のところではキリストが分かっていたいなかった人たち、ユダヤ系の弟子たちのその弱点の根源を正すものです。その弱点の根源、ユダヤ的拒絶反応の根はどこにあったのか？それは一言でいえば、**罪の把握の甘さ**です。

もし、彼らが自分の問題(罪)と真剣に向き合っていたら、このコルネリオと聖使徒と言われた人たちとは、神の前に同じところに立っていることを知るはずです。旧約聖書を几帳面に守ったパリサイ人も、ユダヤ教徒にはならなかったが外国人として精一杯祈りと施しをしてきた百卒長も、まったく暗黒と不道德の中で育ってきたギリシャ人も、罪ある人としては同じところに立つ。そして、同じキリストの血による贖いを必要とするし、必要なものはそれだけしかない！これが分かっていたなければ「主よ、それはできません！それをすれば、聖書の掟が無意味になります」と、聖書の掟を振りかざして簡単に人を裁くようになります。

例えば、離婚したキリスト者に対して、第1コリント書7章11節の「既に別れてしまったのなら、再婚せずにいるか、夫のもとに帰りなさい。また、夫は妻を離縁してはいけない。」を根拠に「二度と結婚はできませんね」などと、その人を絶望の淵に落とすことをするキリスト者がいるわけです。因みに、新聖書注解(いのちのことば社)は、この箇所を次のように解説しています。

〈もし別れたのだったら〉、〈結婚せずにいるか〉、または一度離別した〈夫と和解するか〉、二つに一つしか道はない。彼女は結婚によってつながれたのであって、夫の死による以外(39節)再婚の道はない。このように、パウロは主の命令を、離婚を禁ずるものとしてばかりでなく、離婚後の再婚も禁ずるものとして特に主張する。さらに、〈夫は妻を離別してはいけません〉と加え、言外に夫の再婚も禁じ、主の命令の全体を提示する。

パウロは、キリストの使徒として、聖なる知恵と、人間性への洞察を持った人でした。この後を読んで行きますと、掟とか教科書とかでどうにもしようがない弱い人や、たまた

## 短編説教 3

ま不幸な状況に置かれて、自分の知恵と力ではどうにもならない人への、同情と思いやりをも表しています。つまり彼は、人間の内奥を見通して涙を流す人だったのです。こういったことに気づかないでいると、パウロの言葉を単に掟や教科書のように捉えて「私は御言葉の通りに実行しているのに…」と豪語したり、「あなたは御言葉の通りに従っていない」と人を咎めることにもなりかねません。実に人間というものは、自分に身に覚えのないことに関しては、簡単に人を裁く傾向があります。離婚経験がなければ離婚歴のある人の気持ちに、異性愛者であれば同性愛者の気持ちに寄り添うことは、実に難しいと言えるでしょう。

実際、パウロの手紙の根底に流れている大事なことに気づかないまま、単に掟や教科書のように読む人たちがいるわけですが、パウロの言葉は教科書の項目や律法の条文ではありませんから、相手に対する軽蔑や嫌気を振り払うための「聖なる口実」に利用しますと、一生治らない大やけどを負うことになります。

私は、今回のメッセージ作成にあたり、キリスト教界における同性愛についての様々な意見を見聞きする中で「本気で神に祈り求めた結果、私は同性愛者として祝福されていると確信した」という同性愛キリスト者がいることを知りました。確かに、キリスト者の中には「同性愛の信者などあり得ない!」と、嫌悪する人がいます。それぞれの確信を頭ごなしに批判すべきではありませんが、その思いが、ただ固定観念に縛られている結果であるならば問題です。大切なのは、少なくとも**異性愛キリスト者と同じ神を信じ、真剣に“神と向き合っ”** 生きている**同性愛キリスト者がいる**ことを覚え、できれば「もし、自分が同性愛者としてこの世に生を受けていたら、キリスト者としてどう歩めばよいのだろう…」と。その立場に自らを置いてみることです。

結局、ユダヤ人もローマ人も含めて、パリサイ人も取税人も含めてですが「神の前に人間、最終唯一の問題は、罪の問題しかない!」ということに、ハッキリ目を開いてイエス・キリストを仰いでいれば、お互い自分の資格や能力の有無などバカらしくて考えられなくなる（偏見もなくなる）ということです。またそれは、**神のことばは人を殺す（裁く）ためではなく、人を生かすためにある**ことを悟ることにほかなりません。